

大学生におけるデート DV 被害の男女差 — 恋人による被支配感と自尊感情に与える影響 —

Gender Differences in Dating Violence Victimization of University Students:
Influences on the Sense of Being Controlled by Dating Partners and Self-Esteem.

上野 淳子・松並 知子・青野 篤子
Junko UENO, Tomoko MATSUNAMI, Atsuko AONO

要約

従来のデート DV 研究は、暴力行為を受けた経験のみを被害と見なしてきた。本研究では、デート DV 被害を暴力行為とそれがもたらした影響（恋人による被支配感の高まり、自尊感情の低下）から成るものとして捉え、デート DV 被害の実態と男女差を検討した。大学生を対象とした質問紙調査の結果、恋人からの暴力行為のうち“精神的暴力：束縛”，“精神的暴力：軽侮”，“身体的暴力・脅迫”は男性の方が女性より多く受けており，“性的暴力”のみ男女で受ける割合に差がなかった。しかし、恋人による被支配感は男女差がなく、自尊感情は“身体的暴力・脅迫”を受けた女性が低かったことから、男性は暴力行為を受けても心理的にネガティブな影響は受けにくいことが示唆された。多母集団同時分析の結果、男女とも“精神的暴力：軽侮”および“性的暴力”を受けることで恋人による被支配感が高まり、恋人による被支配感は自尊感情を低下させていた。しかし同時に、暴力行為の影響には男女で異なる点もあった。暴力行為だけでなく恋人による被支配感も含めて暴力被害を捉える重要性が示された。

キーワード：デート DV、ジェンダー、支配—被支配関係、恋愛、IPV

Key Words: dating violence, gender, dominant relationship, romantic relationship, intimate partner violence

1. 問題と目的

かつて配偶者間の暴力は単なる夫婦げんかとして矮小化されていた。しかし、2001年に施行された「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律」（いわゆる DV 防止法）をきっかけに、DV（domestic violence）と呼ばれる社会問題として認識されるようになった。さらに近年は、DV 予備軍ともいえるべき、交際期間におけるパートナー間暴力が注目されている。これを指す英語は dating violence であるが、日本では山口（2003）がデート相手に対する DV として「デート DV」と名付けて以降その名称が広く用いられており、いまやデート DV という言葉を知っている者は6割に達している（内閣府男女共同参画局，2015）。デート DV への関心の高まりを受け、2013年には DV 防止法が改正され、新たに恋人からの暴力も対象となった。しかし、それは「生活の本拠を共にする」恋人もしくは元恋人に限られているため、あてはまるケースはデート DV のごく一部にすぎない。夫婦よりさらに私的で流動性の高い関係における暴力ゆえ、デート DV の防止、対策の体制は未だ不十分である。

日本では2007年頃よりデート DV に関して様々な団体、研究者による調査が行われている

が、欧米に比すると少なく（赤澤，2015），被害の実態やメカニズムには不明な点が多く残されている。そのひとつがデートDV被害の男女差である。親密な関係における暴力は男性が加害者，女性が被害者という図式で語られることが一般的だが（例えばHarway & O'neil, 1999 鶴訳 2011），デートDVにおいては必ずしもそうではない。恋人に暴力行為を受けた経験がある者の割合は，20代から60代まで幅広い年代を対象とした調査では，すべての種類の暴力において女性が男性より高かったが（内閣府男女共同参画局，2015），より若い大学生を対象とした調査では，精神的暴力および身体的暴力において男性の方が高かったのである（長・小堀，2013; 土田，2007）。これらの調査は暴力行為を受けたことがあるか問うて全体に占める割合を算出したものだが，国際的に広く使われているStraus, Hamby, Boney-McCoy, & Sugarman (1996)のCTS2 (The Conflict Tactics Scales Revised)を始め，様々な暴力行為の経験頻度を数値化して合計得点を算出する方法も多くの研究で用いられている。日本においてこの手法を用いた研究は大学生を対象としたものに多いが，その中で暴力行為を受けた得点に男女で有意差があるかどうか検討した研究を概観すると，精神的暴力は男性が高いという結果が複数得られている（松野・秋山，2009; 森永・Frieze・青野・葛西・Li, 2011; 上野・松並・青野・赤澤・井ノ崎，2012）。身体的暴力は，女性が低いという結果（小泉・吉武，2008），男性が高いという結果（松野・秋山，2009; 上野他，2012）いずれも存在する。性的暴力に関しては，女性が低いという結果もあるが（小泉・吉武，2008），その他の研究では男女差は見られていない（井ノ崎・野坂，2009; 松野・秋山，2009; 森永他，2011; 上野他，2012）。海外の研究も，若年男性が恋人から暴力行為を受けている実態を明らかにしている。直近の恋人から暴力行為を受けた男子大学生は精神的暴力で90%，身体的暴力で40%にも達し（Simonelli & Ingram, 1998），女子大学生と同程度（Kaura & Lohman, 2007），あるいはそれ以上に（Katz, Kuffel, & Coblenz, 2002）暴力行為を受けている。暴力の種類別に検討した結果は，精神的暴力は男性が女性より多く受けており（Zweig, Dank, Yahner, & Lachman, 2013），身体的暴力も同様であるが（Jezl, Molitor, & Wright, 1996; Zweig et al., 2013），性的暴力は女性が多く受けている（White, Donat, & Bondurant, 2001 尾田訳 2004; Zweig et al., 2013）。つまり日本でも海外でも，精神的暴力と身体的暴力では男性の方が暴力行為を受けており，性的暴力は，海外では女性の方が受けているという結果が，国内では男女で変わらないという結果が複数の研究で得られている。デートDV防止教育や被害者のケアを行う上で，男性の被害への目配りを忘れてはならない。

だが，これまでの研究をもって，男性のデートDV被害も大きい，あるいは女性より大きいと判断するのは早計に過ぎる。というのも，従来の研究は暴力行為を受けた頻度を被害の大きさと見なしており，デートDV被害の男女差を判断するには重要な視点が欠けているからである。暴力被害の大きさを判断するためには，暴力行為に加え，その行為がもたらした影響も考慮しなければならない。暴力行為がもたらす影響は様々であるが，最も重要なのは暴力をふるう者とふるわれる者の支配—被支配関係である。暴力の本質は暴力行為そのものよりむしろ暴力行為によって形成，維持される支配—被支配関係であり（伊田，2010），相手への恐怖心から主体性を失い，その関係から逃げ出すこともできないという支配—被支配関係の強固さが暴力被害の大きさを判断する指標となる（上野，2014）。たった一度の暴力行為や，精神的暴力

のように暴力とは見なされにくい行為が、強固な支配—被支配関係を成立させる（すなわち重大な被害をもたらす）こともある（上野，2014）。一方，何度も叩かれたとしても（つまり暴力行為を頻繁に受けていても），恐怖心とは無縁で関係を絶ちたければすぐに絶てる自由を感じているならば，被害は軽いと言える（伊田，2010）。伊田（2010）は，男性は暴力行為によって支配されにくいと考えられるため，男性のデートDV被害が多いという論調には注意すべきと指摘している。男性は女性より暴力行為を許容しており（Kaura & Lohman, 2007, 2009），男性は身体が大きく力が強いいため，暴力行為を行うと相手に恐怖心を抱かせやすい一方（Hamby & Jackson, 2010），女性の暴力行為はたいしたことがないと見なされる（Rhatigan, Stewart, & Moore, 2011）。したがって，暴力行為を受けた経験が男性に多くても，恋人に支配されている程度は女性より低い可能性も考えられる。また，暴力行為は支配的關係を構築するだけでなく，暴力をふるわれた者の精神的健康にもネガティブな影響を与え，自尊感情を低下させる（Frieze, 2005; 片岡，2005; White et al., 2001 尾田訳 2004）。女性の方が暴力行為から精神的に重大な負の影響を受けやすいため（Jackson, Cram, & Seymour, 2000），暴力行為は男性の方が多く受けていても，自尊感情なども男性の方が損なわれているとは限らず，この点からも暴力行為が男女それぞれにどのような影響を与えるか，差異に注意しながら被害を検討する必要がある。

本研究の目的は，暴力行為を受けた経験だけでなく，暴力行為がもたらした影響も含めて大学生におけるデートDV被害の実態を捉え，その男女差を検討することである。本研究では暴力被害を，暴力行為を受けた経験，恋人に支配されている程度，自尊感情への影響を合わせたものとし，Figure1に示したモデルを設定した。恋人からの暴力行為を受けることで心理的に支配されるが，暴力行為は二者の関係性に影響するだけでなく，自尊感情を直接低下させる作用も考えられる。また，恋人に支配されること自体も自尊感情を低めるだろう。このモデルが男女ともにあてはまるか，男女差が見られるかを検討する。なお，本研究における「恋人」とは調査参加者がそう認識する者のことであり，交際期間やどのような交際かといった詳細は問わない。

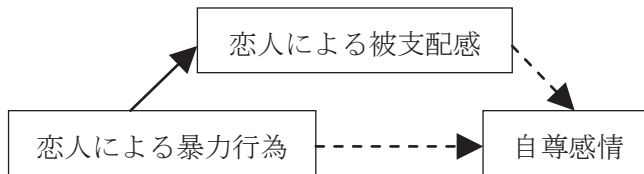


Figure1 本研究で検討するモデル（実線は正のパス，破線は負のパス）

扱う暴力行為は，先行研究に合わせ精神的暴力，身体的暴力，性的暴力の3種類とするが，精神的暴力はその多様性が指摘されている（上野，2014）。赤澤・竹内（2015）は，これまでの研究で扱われてきた精神的暴力を概観し，「相手の行動を制限，監視し，ほかの人間関係から切り離す暴力」，「相手を否定，無視，バカにするなどして貶める暴力」，「直接危害を加えるわけではないが，脅迫してこわがらせる暴力」の3つに概念上分類している。しかし，複数の調

査で「脅迫してこわがらせる暴力」は身体的暴力と同じ因子であることが確認されているため（赤澤・井ノ崎・上野・松並・青野，2017；赤澤・竹内，2015；上野他，2012），本研究でも，精神的暴力を相手の行動を制限する暴力および相手を貶める暴力に分け，脅迫行為は身体的暴力に含めて暴力行為を捉えることとする。暴力行為の影響として，自尊感情とともに恋人による支配を取り上げるが，臨床の現場からは暴力行為を受けた側の心理状態によって支配—被支配関係の程度を把握するチェックリストが提案されている（たとえば伊田，2011；谷本，2012）。しかしこれらのチェックリストは信頼性や妥当性が検討されていないうえ，自尊感情への影響にあたる項目が含まれている。自尊感情は恋人と関係のない要因でも左右されうするため，別個に測定すべきである。信頼性，妥当性が検討された，交際相手との支配—被支配関係を測定する尺度としては，Hamby（1996）の *Dominance Scale*，今野・泊（2001）の被統制感尺度，西村・森田（2013）の支配的恋愛関係チェックリストがある。しかし，*Dominance Scale* は自らが相手を支配している程度を把握するための尺度であり，また *Dominance Scale* も支配的恋愛関係チェックリストも，精神的暴力にあたる行為自体を把握する項目（友人とのつきあいを制限するなど）を含んでおり，暴力行為とその影響である支配—被支配関係を区別できていない。被統制感尺度は相互依存的恋愛を念頭におき，デート DV を想定して作成したものではないため，相手を気にせずのびのびできるかといった内容の項目のみで，交際相手に対する恐怖や不安といった，暴力行為によって生じるであろうネガティブな心理状態を含んでいない。したがって，本研究では，暴力行為や自尊感情に関する項目を含まず，交際相手に恐怖心を抱き支配されているという認識である“恋人による被支配感”を測定する項目を新たに作成して用いる。

2. 方法

調査参加者

中国・近畿・北陸地方の大学および短期大学に所属する 616 名（女性 461 名，男性 141 名，その他 1 名，不明 13 名）。平均年齢は 19.97 歳，年齢の分布は 18 歳から 24 歳であった（ $SD=1.01$ ）。

調査方法

無記名の質問紙調査を行った。授業中に調査用紙を配布し，その場で，あるいは後日回収した。

倫理的配慮

調査に先立ち，福山大学学術倫理審査委員会の承認を得た。調査用紙を配布した際，調査の目的，参加は自由であること，参加しなくても不利益は生じないこと，個人は特定されないこと，回答したくない質問をとばしたり回答を中断したりしても構わないことを，口頭および紙面で説明した。調査用紙末尾には地域のデート DV 相談機関を記載し，切り取って持ち帰ることができるようにした。

質問項目

1. **自尊感情尺度** Rosenberg（1965）が作成し，山本・松井・山成（1982）が日本語訳した 10 項目，5 件法の尺度を用いた。

2. **恋人との交際経験の有無** 現在または過去に恋人がいた経験があるか尋ね，経験がある者

のみ、以降の質問への回答を求めた。

3. 恋人から受けた暴力行為 恋人から受けた暴力行為の種類と経験頻度を測定するため、赤澤他（2017）の全18項目を用いた。“あなたはこれまでに恋人から以下の行為を受けたことがありますか”と尋ね、「これまでに一度もない」、「1回」、「2回」、「3～5回」、「6～10回」、「11～20回」、「20回以上」の7件法で回答を求めた。なお、交際した恋人が複数いる場合はその中のひとりについて回答するよう指示した。

4. 恋人による被支配感 恋人に支配されている程度を測定するために作成した全10項目を用いた。作成の際は、伊田（2011）や谷本（2012）による暴力のチェックリスト、Dominance Scale（Hamby, 1996）、被統制感尺度（今野・泊, 2001）、支配的恋愛関係チェックリスト（西村・森田, 2013）の項目や、暴力によって確立する支配—被支配関係についての文献の記述を参考にし、デートDVの被害者支援および防止教育を行っている複数の臨床心理士、デートDV研究を行っている複数の心理学教員で内容的妥当性を検討した。調査用紙では、前問の恋人への自分の態度や気持ちについて、「よくあてはまる」から「全くあてはまらない」の5件法で回答を求めた。過去の恋人である場合、恋人だった当時の自分の様子を答えるよう指示した。

3. 結果

分析対象者の抽出

調査参加者のうち、恋人との交際経験があり欠損値のない女性267名（女性の57.92%）、男性65名（男性の46.10%）、計332名（全体の53.90%）を分析対象とした。年齢の分布は18歳から24歳であった（ $M=20.03$, $SD=1.01$ ）。

恋人から受けた暴力行為の検討

恋人から受けた暴力行為は、本研究と同一データを分析した赤澤他（2017）で示した通り、4因子に分類された。ただし本研究では、検討するモデルとの整合性を考慮して因子名を変更した。「友人との付き合いを制限される」など、行動を制限、監視される“精神的暴力：束縛”（3項目）、「相手の意に沿わないと無視される」など、否定、無視、バカにされる“精神的暴力：軽侮”（7項目）、「げんこつや怪我をさせるようなもので殴られる」、「別れるなら死んでやると言われる」などの“身体的暴力・脅迫”（5項目）、「性交を強要される」などの“性的暴力”（3項目）である。なお、調査では7件法を用いたが、暴力行為を頻繁に受けたことがある者は多くなかったため、分析では暴力行為を受けたことがない者を0点、ある者を1点とする2件法に変換した上でそれぞれの暴力行為ごとに合計得点を算出した。信頼性係数は、“精神的暴力：束縛”が $\alpha=.67$ 、“精神的暴力：軽侮”が $\alpha=.83$ 、“身体的暴力・脅迫”が $\alpha=.83$ 、“性的暴力”が $\alpha=.81$ であった。

暴力行為を一度でも受けた経験がある者となない者の割合に男女で違いがあるか、 χ^2 検定を行った（Table1）。“精神的暴力：束縛”、“精神的暴力：軽侮”、“身体的暴力・脅迫”では人数の偏りが有意であり、残差分析の結果、暴力行為を受けたことがある者の割合は男性が女性より高かった。“性的暴力”のみ男女で偏りがなかった。いずれの暴力行為も受けたことがない者は女性82名（交際経験のある女性の30.71%）、男性11名（交際経験のある男性の16.92%）であ

った。暴力行為を一度でも受けたことがある者が恋人との交際経験のない者も含む調査参加者全体に占める割合を算出したところ，“精神的暴力：束縛”は女性 27.77%，男性 31.91%，“精神的暴力：軽侮”は女性 29.93%，男性 31.91%，“身体的暴力・脅迫”は女性 8.24%，男性 15.60%，“性的暴力”は女性 19.09%，男性 13.48%であった。

Table1 暴力行為を受けた経験の有無と性別の χ^2 検定結果

	性別		暴力を受けた経験		χ^2 値
			あり	なし	
精神的暴力：束縛	女性	<i>n</i>	128	139	9.50 ***
		%	47.94	52.06	
		調整済み標準化残差	-3.1***	3.1***	
	男性	<i>n</i>	45	20	
		%	69.23	30.77	
		調整済み標準化残差	3.1***	-3.1***	
精神的暴力：軽侮	女性	<i>n</i>	138	129	6.51 *
		%	51.69	48.32	
		調整済み標準化残差	-2.6**	2.6**	
	男性	<i>n</i>	45	20	
		%	69.23	30.77	
		調整済み標準化残差	2.6**	-2.6**	
身体的暴力・脅迫	女性	<i>n</i>	38	229	13.58 ***
		%	14.23	85.77	
		調整済み標準化残差	-3.7***	3.7***	
	男性	<i>n</i>	22	43	
		%	33.85	66.15	
		調整済み標準化残差	3.7***	-3.7***	
性的暴力	女性	<i>n</i>	88	179	0.33
		%	32.96	67.04	
		調整済み標準化残差	0.6	-0.6	
	男性	<i>n</i>	19	46	
		%	29.23	70.77	
		調整済み標準化残差	-0.6	0.6	

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

恋人による被支配感、自尊感情の検討

恋人による被支配感の全10項目について、1因子を指定し最尤法による因子分析を行ったところ、2項目の共通性および因子負荷量が低かった。また、 α 係数を算出したところ、その2項目を削除した方が α 係数が高かった ($\alpha = .79$)。そこで、2項目を削除した全8項目の合計を恋人による被支配感得点とした (Table2)。

Table2 恋人による被支配感項目

$\alpha=.79$	<i>M</i>	<i>SD</i>	因子分析結果 (最尤法)	
			因子負荷量	共通性
恋人の反応が怖いので、言いたいことを言えない	2.10	1.28	.78	.61
恋人が機嫌を損ねないように、いろいろなことを我慢している	2.49	1.33	.75	.55
何をするにも恋人がどう思うか気にしてしまい、自由にふるまえない	2.41	1.32	.73	.53
いつも恋人の顔色をうかがい、びくびくしてしまう	1.99	1.23	.70	.49
恋人と別れたくなくても、恋人が許さないので無理だと思う	1.84	1.12	.38	.14
恋人といると、安心してのびのびできる*	2.17	1.20	.37	.14
恋人とは異なる意見でも、話し合えばわかってくれると思う*	2.29	1.22	.35	.12
恋人に対しては誰よりも正直に気持ちを打ち明けられる*	2.78	1.33	.30	.10
何事も恋人の意見を聞かないと、自分一人では決められない(削除)	1.70	1.01	.26	.07
恋人と一緒にいないと、なんとなく不安になる(削除)	2.59	1.23	.22	.05

* 逆転項目

自尊感情尺度についても α 係数を算出したところ、 $\alpha=.85$ と十分な信頼性が確認されたため、全 10 項目の合計得点を算出した。

恋人から受けた暴力行為の有無と性別によって恋人による被支配感が異なるか検討するため、恋人から受けた暴力行為の有無と性別を独立変数、恋人による被支配感を従属変数とする 2 要因分散分析を行った (Table3)。その結果、“精神的暴力：軽侮”の主効果、“身体的暴力・脅迫”の主効果、“性的暴力”の主効果が見られ、これらの暴力行為を受けたことのある者がいない者よりも恋人による被支配感が高かった。また、恋人から受けた暴力行為の有無と性別によって自尊感情が異なるか検討するため 2 要因分散分析を行ったところ、“身体的暴力・脅迫”と性別の交互作用が有意であった (Table4)。単純主効果の検定を行ったところ、暴力行為を受けたことがある群において性別の主効果が有意であり ($F(1,328) = 6.44, p < .05, \eta^2 = .02$)、“身体的暴力・脅迫”にあたる行為を受けた女性の自尊感情は同様の行為を受けた男性よりも低かった。

Table3 恋人による被支配感得点の分散分析結果

	暴力	性別	n	M	SD	主効果		交互作用		
						F 値	η^2	F 値	η^2	
精神的暴力： 束縛	あり	女性	128	19.06	7.03	暴力	0.69	.00	1.96	.01
	あり	男性	45	18.31	6.39	性別	0.36	.00		
	なし	女性	139	16.96	5.83					
	なし	男性	20	18.85	5.50					
精神的暴力： 軽侮	あり	女性	138	19.72	6.95	暴力	17.19 ***	.05	0.03	.00
	あり	男性	45	19.69	6.01	性別	0.04	.00		
	なし	女性	129	16.09	5.42					
	なし	男性	20	15.75	5.47					
身体的暴力・ 脅迫	あり	女性	38	21.21	7.49	暴力	5.24 *	.02	2.24	.01
	あり	男性	22	19.00	6.09	性別	0.52	.00		
	なし	女性	229	17.43	6.18					
	なし	男性	43	18.20	6.14					
性的暴力	あり	女性	88	20.57	7.33	暴力	18.18 ***	.05	0.01	.00
	あり	男性	19	21.37	7.27	性別	0.55	.00		
	なし	女性	179	16.69	5.66					
	なし	男性	46	17.28	5.16					

得点範囲：8-40

* $p < .05$, *** $p < .001$

Table4 自尊感情得点の分散分析結果

	暴力	性別	n	M	SD	主効果		交互作用		
						F 値	η^2	F 値	η^2	
精神的暴力： 束縛	あり	女性	128	29.11	6.65	暴力	0.60	.00	0.77	.01
	あり	男性	45	31.29	8.55	性別	1.42	.00		
	なし	女性	139	29.22	7.24					
	なし	男性	20	29.55	5.81					
精神的暴力： 軽侮	あり	女性	138	29.02	6.40	暴力	0.12	.00	0.00	.00
	あり	男性	45	30.62	8.31	性別	2.50	.01		
	なし	女性	129	29.32	7.52					
	なし	男性	20	31.05	6.71					
身体的暴力・ 脅迫	あり	女性	38	27.76	5.29	暴力	0.26	.00	3.88 *	.01
	あり	男性	22	32.59	7.84	性別	5.48 *	.02		
	なし	女性	229	29.40	7.17					
	なし	男性	43	29.81	7.71					
性的暴力	あり	女性	88	30.16	7.24	暴力	0.85	.00	0.21	.00
	あり	男性	19	31.11	9.94	性別	1.79	.01		
	なし	女性	179	28.68	6.78					
	なし	男性	46	30.61	6.86					

得点範囲：10-50

* $p < .05$

モデルの検討

Figure1 に示したモデルを検証するため、性別で集団を分け、集団間の等値制約をおかずに多母集団同時分析を行った。恋人から受けた暴力行為全てを独立変数とした当初のモデルはRMSEA=.22と適合度が低かった。そこで、男女いずれにおいても効果が有意でなかった“身体的暴力・脅迫”から恋人による被支配感へのパスを除外したところ、適合度が最良となったため ($\chi^2(2) = .46, p = .80, GFI = 1.00, AGFI = .99, CFI = 1.00, RMSEA = .00$), それを最終モデルとした。なお、男女間で係数の大きさに差があった、“精神的暴力：軽侮”と“身体的暴力・脅迫”間のパス、“精神的暴力：軽侮”と“性的暴力”間のパス、“身体的暴力・脅迫”と“性的暴力”間のパス、“精神的暴力：束縛”から恋人による被支配感へのパスに等値制約をおいた多母集団同時分析も実施したが、適合度は先のモデルよりも低かったため ($\chi^2(6) = 34.83, p < .001, GFI = .96, AGFI = .74, CFI = .94, RMSEA = .12$), 等値制約をおかない分析を採用することとした。有意でなかったパスを削除した女性の結果を Figure2 に、男性の結果を Figure3 に示した。

男女に共通して見られた結果は、暴力行為間の正の有意な相関、“精神的暴力・軽侮”と“性的暴力”から恋人による被支配感への正の有意なパス、恋人による被支配感から自尊感情への負の有意なパスであった。また、男女とも“身体的暴力・脅迫”からの有意なパスは見られなかった。暴力行為からのパスには男女で違いも見られた。女性は“精神的暴力・束縛”からの有意なパスは見られなかった。また、女性の自尊感情へは“性的暴力”から有意な、しかも正のパスが見られた。男性では、“精神的暴力・束縛”から恋人による被支配感への有意なパスが見られたが、こちらも予想と異なり負のパスであった。

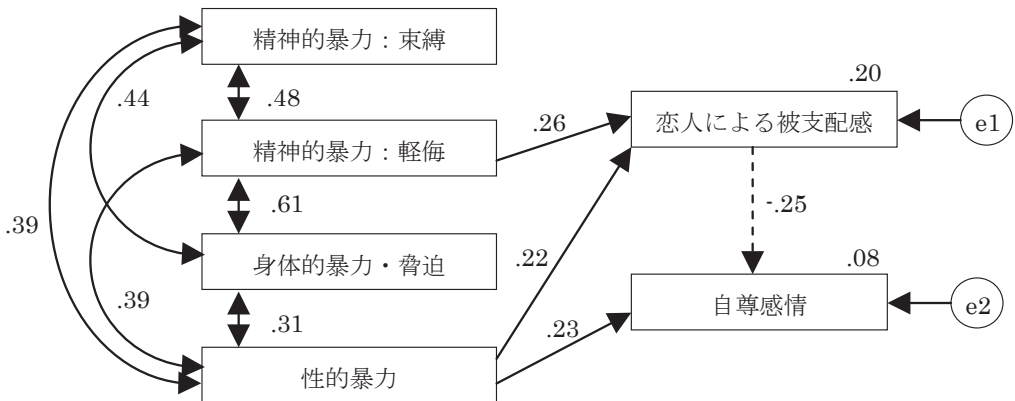


Figure2 女性における、恋人から受けた暴力行為、恋人による被支配感、自尊感情の関連 (N=267)

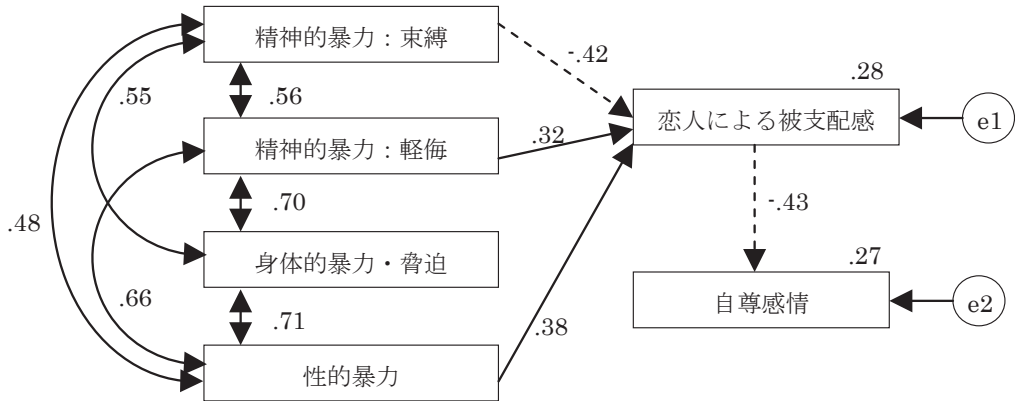


Figure3 男性における、恋人から受けた暴力行為、恋人による被支配感、自尊感情の関連 (N=65)

4. 考察

交際経験のある者の多くが恋人から暴力行為を受けたことがあり、女性で 69.29%、男性で 85.08%に上っていた。全く同じ暴力行為を扱ったわけではないため比較には注意が必要であるが、大学生 535 名を調査した上野他（2012）におけるその割合は女性 66.2%、男性 82.4%であり、本研究とほぼ同じ数値であった。Cornelius & Resseguie（2007）によると、精神的暴力は身体的暴力に先行するため、精神的暴力は多くのカップルに見られるが身体的暴力はそうでなく、精神的暴力なしに身体的暴力があるカップルはまれである。本研究でも精神的暴力にあたる行為を経験している者は多いが身体的暴力（脅迫行為も含む）を経験している者は比較的少なかった。また、精神的暴力および身体的暴力は男性が女性より受けており、性的暴力には男女で違いがないことが明らかとなったが、これも先行研究の結果（松野・秋山, 2009; 上野他, 2012）と同じであった。既に述べたように、デート DV の性的暴力は、海外の研究では女性に多いが、国内では本研究も含め複数の研究が男女差を見いだしていない。その原因が用いた質問項目の内容の違いによるものなのか、それとも文化的な違いなのかについては今後の慎重な検討が必要である。

本研究では恋人による被支配感という概念を用い、恋人から受けた暴力行為および自尊感情と分けて測定することで被害の大きさを把握するという新たな方法を用いた。恋人による被支配感とは、“精神的暴力：束縛”以外のすべての暴力で、暴力行為を受けた経験のある者がいない者より高かった。また、多母集団同時分析の結果、男女とも恋人による被支配感から自尊感情へ負の有意なパスが見られたことから、本研究で用いた恋人による被支配感の妥当性はある程度確認されたといえよう。今後はさらに十分な信頼性と妥当性の検討を経ることによって、暴力行為の測定とセットで被害の大きさを測定できる尺度として用いることができるだろう。

精神的暴力および身体的暴力は男性が多く受けているにも関わらず、恋人による被支配感とは男性と女性で変わらなかったことから、男性は暴力行為を受けても支配されにくいことが示唆された。また、自尊感情も、“身体的暴力・脅迫”を受けた女性が低いという結果が得られたのみで、男性が女性より低いという結果は得られなかった。このことは、暴力行為を受けた頻度

は、心理的に相手に支配され自尊感情が損なわれるという暴力の影響の大きさと一致しないことを示している。したがって、暴力被害を暴力行為とその影響に分けて捉えるという本研究が用いた手法の重要性が示されたと同時に、暴力行為を女性より受けているからといって男性のデートDV被害は女性より大きいと見なすことは適切でないことが明らかとなった。

多母集団同時分析の結果からも、暴力行為を受けた経験が必ずしも恋人による被支配感を高め、自尊感情を低めるわけではないこと、その様態には男女差が見られることがわかった。女性が恋人に支配されるのは、軽侮される精神的暴力と性的暴力によってであったが、性的暴力には女性の自尊感情を高める効果もあった。一般に性的暴力は「魂の殺人」と呼ばれるほど重大なダメージを被害者に与えるが、本研究の結果は、性的関係が当然とされる親密な関係での性的暴力は非常に複雑な意味をはらんでいることを示している。しかし、性的暴力にあたる行為の頻度、本人の意思に反する程度、性的行為を強要する方法によっては自尊感情を著しく損なうと推察されるため、恋人による性的暴力が女性に与える影響については今後も慎重に検討する必要がある。本研究の結果でも、性的暴力が女性に与える負の影響が示されている。すなわち、暴力行為間には相関があるため、性的暴力を受ける女性は他の暴力行為も受けやすい。また、性的暴力は恋人による被支配感を高め、恋人による被支配感は自尊感情を低めるため、性的暴力も恋人による被支配感を經由して結果的には自尊感情を低めるのである。それにも関わらず性的暴力と自尊感情に正のパスが見られた理由のひとつに、本研究で用いた暴力行為の項目の妥当性の問題が考えられる。すなわち、上述した「性的暴力にあたる行為の頻度、本人の意思に反する程度、性的行為を強要する方法」を弁別できず、単に恋人から性的行為を強く求められたという経験も含んでしまったのではないかとすることである（そしてこのような経験は自身の魅力の証として自尊感情を高める可能性はある）。これと同様の問題をはらむ本研究の結果として、男性では、束縛される精神的暴力を受けると、むしろ恋人への恐怖心を持つことなく自由に振る舞えるというものがある。男性は精神的暴力に対して女性より許容度が高く、その行為に愛情を感じやすいため（笹竹, 2014）、自分を束縛する行為は暴力ではなく愛されている証拠として受けとめ、恋人の顔色をうかがうことなく振る舞えるという可能性もあるものの、やはり束縛が男性に与える影響については暴力行為の妥当性も含めて今後の慎重な検討が必要であろう。もちろん、女性と同様に男性でもそれぞれの暴力行為は相関関係にあるため、束縛されている男性は恋人による被支配感を高める他の暴力行為も受けやすく、本研究においても束縛が男性に肯定的影響ばかりをもたらすと示されたわけではない点は留意すべきである。また、軽侮される精神的暴力と性的暴力が男性の恋人による被支配感を高める点は女性と同じであった。男女とも、身体的暴力および脅迫は恋人による被支配感を高めず、自尊感情を低めることもなかったが、分散分析の結果からは、身体的暴力および脅迫行為を受けた女性の自尊感情が他より低いことが明らかであるため、女性にとって身体的暴力は負の影響を与えると言えるのではないかと。男性は、身体的頑健さゆえに身体的暴力から女性ほど影響を受けないのだと考えられる（Hamby & Jackson, 2010）。一方、男性も恋人にふるわれる身体的暴力から深刻な負の影響を受けているという結果もあるため（Howard & Wang, 2003）、身体的暴力行為のレベル、その行為を受けた時期が調査時点からどれくらい前なのか、恋人との関係性の質はどの

ようなものなのか、などを考慮した検討が必要であろう。いずれにしても、重大さが理解されやすい身体的暴力よりも、否定、無視、馬鹿にされるといった、どちらかというところと些細と見なされがちな精神的暴力の方が男女とも負の影響を与えていたことは注目すべき結果である。身体的暴力より精神的暴力のほうが受けるダメージが大きいことを示した Follingstad, Rutledge, Berg, Hause, & Polek (1990) と同様、本研究でも精神的暴力を軽視すべきではないことが示された。

本研究では、多様な暴力行為を受けることと、それによってもたらされた恋人による被支配感および自尊感情を検討することで、デートDV被害の実態とその男女差を検討した。暴力行為の種類と性別によって恋人による被支配感および自尊感情への影響が異なることが示されたが、最後に今後の研究のために残された課題を改めて整理する。まず、暴力行為の経験だけでなく、暴力行為自体のレベルも合わせたより詳細な検討が必要である。例えば同じ身体的暴力でも、怪我をさせるほど殴るという行為と軽く叩くという行為は明らかに暴力としてのレベルが異なり、その行為が与える影響も当然異なると考えられる。既に指摘したように、性的暴力が女性の自尊感情を高め、束縛が男性の被支配感を低めるという本研究で得られた予想外の結果も、暴力行為のレベルを詳細に勘案すれば否定される可能性が高い。次に、本研究では恋人との交際経験がある者を一律に分析対象とし、その交際期間がいつのことなのか、つまり暴力行為を受けた経験がどのくらい前なのかを考慮しなかった。大学生であるため長くても数年前とは推定されるものの、現在の出来事なのか、それとも数年前の出来事なのかでその暴力行為の影響力は異なる可能性が高い。特に自尊感情は現時点でのものであるため、その後の様々な要因に影響されている可能性もある。また、本研究では被害経験のみを取り上げたが、加害経験も忘れてはならない。加害と被害には有意な相関があり (White & Koss, 1991)、相手を支配するための暴力と自己防衛のための暴力は異なるため、暴力の相互性に配慮すべきである (赤澤, 2015)。理想的にはカップル相互を対象とした研究を行うべきであろう。最後に、本研究では恋人の性別を問わなかったが、海外では異性愛カップル以外の様々なカップルを対象とした研究が行われており、受ける暴力の種類には性的指向で違いもあることが明らかにされている (Freedner, Freed, Yang, & Austin, 2002; Waldner-Haugrud & Gratch, 1997; Waterman, Dawson, & Bologna, 1989)。調査参加者と恋人双方の性別、性的指向、その組み合わせに配慮した調査が今後望まれる。

付記

本研究は平成 26 年度福山大学学内研究助成金および JSPS 科研費 JP16K01805 の助成を得て行われた。

あとがき

本研究における調査の立案、実施は共著者全員で行った。分析と執筆は第一著者が行い、他の著者は分析方法および考察に全般的に関わった。

引用文献

- 赤澤淳子 (2015). 親密な二者関係のダークサイドとしてのデートDV 発達心理学研究, 26, 288-299.
- 赤澤淳子・井ノ崎敦子・上野淳子・松並知子・青野篤子 (2017). デートDVにおける暴力の頻度と精神的ダメージ—ジェンダーと暴力の双方向性への着目 福山大学人間文化学部紀要, 17, 56-68.
- 赤澤淳子・竹内友里 (2015). デートDVにおける暴力の構造について—頻度とダメージとの観点から 福山大学人間文化学部紀要, 15, 51-72.
- Cornelius, T.L. & Resseguie, N. (2007). Primary and secondary prevention programs for dating violence: A review of the literature. *Aggression and Violent Behavior, 12*, 364-375.
- Freedner, N., Freed, L.H., Yang, Y.W., & Austin, S.B. (2002). Dating violence among gay, lesbian, and bisexual adolescents: results from a community survey. *Journal of Adolescent Health, 31*, 469-471.
- Frieze, I.H. (2005). *Hurting the one you love: Violence in relationships*. CA: Thomson Wadsworth.
- Follingstad, D.R., Rutledge, L.L., Berg, B.J., Hause, E.S., & Polek, K.E. (1990). The role of emotional abuse in physically abusive relationships. *Journal of Family Violence, 5*, 105-120.
- Hamby, S.L. (1996). The dominance scale: Preliminary psychometric properties. *Violence and Victims, 11*, 199-212.
- Hamby, S., & Jackson, A. (2010). Size does matter: The effects of gender on perceptions of dating violence. *Sex Roles, 63*, 324-331.
- Harway, M., & O'neil, J.M. 1999 *What causes men's violence against women?* CA: Sage Publications Inc. (鶴 元春 (訳) (2011). パートナー暴力—男性による女性への暴力の発生メカニズム 北大路書房)
- Howard, D.E., & Wang, M.Q. (2003). Psychosocial factors associated with adolescent boy's reports of dating violence. *Adolescence, 38*, 519-523.
- 伊田広行 (2010). デートDVと恋愛 大月書店
- 伊田広行 (2011). ストップ! デートDV—防止のための恋愛基礎レッスン 解放出版社
- 井ノ崎敦子・野坂祐子 (2009). 大学生における加害行為と攻撃性との関連 学校危機とメンタルケア, 2, 73-85.
- Jackson, S.M., Cram, F., & Seymour, F.W. (2000) Violence and sexual coercion in high school students' dating relationships. *Journal of Family Violence, 15*, 23-36.
- Jezl, D.R., Molidor, C.E., & Wright, T.L. (1996). Physical, sexual and psychological abuse in high school dating relationships: Prevalence rates and self-esteem issues. *Child and Adolescent Social Work Journal, 13*, 69-87.
- 片岡弥恵子 (2005). 女性に対する暴力スクリーニング尺度の開発 日本看護科学会誌, 25, 51-60.
- Katz, J., Kuffel, S.W., & Coblenz, A. (2002). Are there gender differences in sustaining dating violence?: An examination of frequency, severity, and relationship satisfaction. *Journal of Family Violence, 17*, 247-271.
- Kaura, S.A., & Lohman, B.J. (2007). Dating violence victimization, relationship satisfaction, mental health problems, and acceptability of violence: A comparison of men and women. *Journal of Family Violence, 22*, 367-381.
- Kaura, S.A., & Lohman, B.J. (2009). Does acceptability of violence impact the relationship between satisfaction, victimization, and commitment levels in emerging adult dating relationships? *Journal of Family Violence, 24*, 349-359.
- 小泉奈央・吉武久美子 (2008). 青年期男女におけるデートDVに関する認識についての調査 純心現代福祉研究, 12, 61-75.
- 今野裕之・泊 真児 (2001). 恋愛関係における被統制感について 目白大学人間社会学部紀要, 1, 45-55.
- 松野 真・秋山 胖 (2009). 若年層における特定異性間の暴力 (dating violence) に関する研究—大学生を対象とした dating violence に関する意識・実態について 生活科学研究, 31, 117-128.
- 森永康子・Irene H. Frieze・青野篤子・葛西真記子・Manyu Li (2011). 男女大学生の親密な関係における暴力 女性学評論, 25, 219-236.

- 西村 香・森田展彰 (2013). 大学生における支配的恋愛関係チェックリストの作成, および信頼性, 妥当性の検討—「束縛」に焦点化した dating violence 調査票— アディクションと家族, 29, 244-253.
- 内閣府男女共同参画局 (2015). 男女間における暴力に関する調査 (平成 26 年度調査) Retrieved from http://www.gender.go.jp/policy/no_violence/e-vaw/chousa/h26_boryoku_cyousa.html (2017 年 3 月 1 日)
- Rhatigan, D.L., Stewart, C., & Moore, T. M. (2011). Effects of gender and confrontation on attributions of female-perpetrated intimate partner violence. *Sex Roles, 64*, 875-887
- Rosenberg, M. (1965). *Society and adolescent self-image*. NJ: Princeton University Press.
- 笹竹英穂 (2014). 大学生の心理的データ DV の被害経験の実態および被害の認識の性差—学生相談研究, 35, 56-69.
- Straus, J.A., Hamby, S.L., Boney-McCoy, S., & Sugarman, D.B. (1996). The revised Conflict Tactics Scales (CTS2): Development and preliminary psychometric data. *Journal of Family Issues, 17*, 283-316.
- Simonelli, C.J., & Ingram, K.M. (1998). Psychological distress among men experiencing physical and emotional abuse in heterosexual dating relationships. *Journal of Interpersonal Violence, 13*, 667-681.
- 谷本恵美 (2012). カウンセラーが語るモラルハラスメント—人生を自分の手に取りもどすためにできること— 晶文社
- 土田陽子 (2007). 青少年の性的被害と恋人からの DV 被害の現状と特徴—日本性教育協会 (編) 「若者の性」白書—第 6 回青少年の性行動全国調査報告 (pp.121-144) 小学館
- 上野淳子 (2014). デート DV 研究の問題点—四天王寺大学紀要, 57, 195-205.
- 上野淳子・松並知子・青野篤子・赤澤淳子・井ノ崎敦子 (2012). 大学生の性に対する態度がデート DV に及ぼす影響—四天王寺大学紀要, 53, 111-122.
- 長 香織・小堀尋香 (2013). デート DV の現状と課題—大学生を対象とした調査から—宇都宮大学教育学部紀要, 63, 211-219.
- Waldner-Haugrud, L.K., & Gratch, L.V. (1997). Sexual coercion in gay/lesbian relationships: Descriptives and gender differences. *Violence & Victims, 12*, 87-98.
- Waterman, C.K., Dawson, L.J., & Bologna, M.J. (1989). Sexual coercion in gay and lesbian relationships: Predictors and implications for support services. *Journal of Sex Research, 26*, 118-124.
- White, J.W., Donat, P. L.N., & Bondurant, B. (2001). A developmental examination of violence against girls and women. In R.K. Unger (Ed.), *Handbook of the psychology of women and gender*. New York: John Wiley & Sons. (尾田貴子 (訳) (2004). 女の子および女性に対する暴力の発達の検討—森永康子・青野篤子・福富 護 (監訳) 女性とジェンダーの心理学ハンドブック (pp.406-421) 北大路書房)
- White, J.W., & Koss, M.P. (1991). Courtship Violence: Incidence in a national sample of higher education student. *Violence and Victims, 6*, 247-256.
- 山口のり子 (2003). デート DV 防止プログラム実施者向けワークブック—相手を尊重する関係をつくるために— 梨の木舎
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面—教育心理学研究, 30, 64-68.
- Zweig, J.M., Dank, M., Yahner, J., & Lachman, P. (2013). The rate of cyber dating abuse among teens and how it relates to other forms of teen dating violence. *Journal of Youth & Adolescence, 42*, 1063-1077.